

しょんぼりとした伊吹を見ながらディアポロはいつもの調子で豪快に笑うと優しく頭を撫でた。

「ありがとう。気持ちはすごく嬉しいよ。そうだな伊吹、今度から気が向いた時でいいから議場に来て一緒に話をしてくれないか？君と話しているととても癒されるんだ」

「それだけでいいの？」

「ああ。私にとっては伊吹の存在が一番の活力だ」

そう言うときディアポロは伊吹の唇に軽くキスをした。

「殿下、ここじゃだれか来ちゃうよ？」

「大丈夫だ。こんな時間に来る悪魔なんてバルバトス位しかない」

「バルバトスは来るんだ」

「私の秘書兼執事だからな。甘いものはいつも彼が持ってきてくれるんだが、今日はどうしても間に合わなかったんだ」

ディアポロは再び伊吹の唇に軽くキスをするときと伊吹の後頭部に手を添える。

小鳥がえさをついばむときのようにディアポロの唇は何度も何度も伊吹の唇の上に重なり、とうとう伊吹の上唇と下唇を交互に挟むようになった。

始め軽く重なるだけだった唇はどんどん近くなり、今や隙間なくぴったりとくっついていた。

そして二人の口腔内では互いの舌と舌が絡み合いたわむれ、気が付けば互いの欲情を誘うものになっていた。

「ふは・・・」

唇が離れた時伊吹は呼吸を取り戻すとうっとりとした気配が漂うため息をついた。伊吹が目の前を見るとそこには少し困った顔をしたディアポロがいて、小さく自己虐気味に笑っていた。

「困ったことが起きた。伊吹としてみたてしようがない気分になってしまったよ」「え？でも・・・」

ここは議場だし。と伊吹が言いかけた時ディアポロは伊吹を抱きかかえ机の上に乗らせた。

「どうせ今の時間じゃだれも来ない。それに私も多忙で次、いつ伊吹と愛し合えるか分からない。ここでさせてくれないか？」

「え・・・？」

伊吹が返事に困っているとディアボロの手は制服越しに伊吹の胸に触れていた。